

## 書 評

高田 明. 『相互行為の人類学—「心」と「文化」が出会う場所』新曜社, 2019 年, 248 p.

飯田 卓\*

### 相互行為の人類学とは

人類学は、ひと頃に較べるとずいぶんいろいろな対象にとり組むようになった。本書に題されている相互行為とは、二者またはそれ以上の人たちが相互に影響しあいながら対面的におこなう行為というほどの意味だが、このことばになじみがない読者は、またあら手の研究対象が現われたと思うかもしれない。しかしそれは誤解である。それどころか、人文科学研究所の谷泰がこの問題にとり組んで以来、京都大学は、じつに 40 年近くにわたってこの問題への取り組みを先導してきた [たとえば谷 1987]。ただし、相互行為への着眼は、社会学者ゴッフマンのほうが早い。著者の高田明は、谷らの議論を正統なかたちで受け継ぎつつ、関連する内外の潮流を「相互行為の人類学」という旗印のもとにまとめあげた。その意味で本書は、この分野の蓄積を見わたす網羅的なレビューの著作であると同時に、著者の強い独創性をも帯びている。

本書はまた、具体例を豊富に提示することで、大学院レベルの初学者にむけてのまたとない手引書となっている。さらに、本書のもとになった講義で出た質問もふんだんに掲

載することで、学部レベルの読者に対しても、当該分野の理解に必要なさまざまな予備知識を提供している。このように本書は、当該分野の概要を幅広い読者層に示す好著でもある。

本書の内容を章ごとにみていこう。第 1 章「相互行為の人類学への招待」では、相互行為の人類学の野心が提示される。それは、主として「心」という個人的・個体的現象を扱ってきた心理学と、主として「文化」という集合的現象を扱ってきた人類学との架橋である。相反する（とみなされがちな）アプローチの統合により、バランスをとりつわれわれの経験世界に近づいていくことが「相互行為の人類学」の目指すところである。第 2 章「理論と方法」では、文化人類学ならびに言語人類学において相互行為がどのように記述・分析されてきたかがレビューされる。そこでは文化人類学と言語人類学の関係といった基本的な解説から、会話分析の考えかたや記述方法の提示、ターン・テイキングや基本連鎖、修復、参与枠組みとフッティングといった基本概念の説明にいたるまで、幅広い話題におよんでいる。初学者は、まずこの 2 つの章を熟読することで、相互行為の人類学にとり組む心構えを身につけることができよう。

### 5 つのテーマ

続く 5 つの章では、相互行為の人類学においてしばしばとり上げられる話題に焦点を絞り、それぞれのテーマに関する研究動向を示している。いずれの章でも、著者が関わる

\* 国立民族学博物館

プロジェクトの研究成果が惜しみなく提供されており、専門的でありながら具体性に富む内容となっている。本書がたんなる教科書にとどまらず、最新の研究成果を紹介する独創的著作ともなっている所以である。このことは、著者をして「(本書は) 研究の成果を網羅的に示したものではない」(p. ii) と言わしめる理由ともなっているが、それは謙遜にすぎず、当該分野の重要な論点がかんりのていど網羅されていると評者にはみえる。

各章の論点を詳しく述べることは、著者の研究に関連した膨大な研究動向を要約することにほかならず、かぎられた紙面ではとうていはたすことができないので、本書を読んでいただくことにしよう。そのかわりこの書評では、各章の標題と相互の関連を、評者なりに示したい。著者の考えといくぶん異なる点があるかもしれないが、あらかじめご了承ください。

第3章「社会的認知」は、周囲の社会環境や自己に関する認知のうち、社会文化的拘束を受けやすい側面に焦点を当てている。しかし著者は、文化の壁を強調するのではなく、あらかじめ背景的知識を共有しない他者どうしが共通理解に到達しうる点を重視する。そこで次に問題となるのが他者とはなにかということで、第4章「他者理解」ではこのことに焦点を当てている。とりわけ注目されるのは、ヒトとチンパンジーの相互理解を論じた著者の原著論文の事例である。近年は霊長類学と文化人類学の対話が進みつつあるが、ヒトとそれ以外の霊長類との相互行為をとり上げたモノグラフはまだ多くなく、動物を究

極の他者に定位する近年の民族誌を先がけている。ヒトとチンパンジーは自己表現においても認知においても遺伝的に異なっているにもかかわらず、相互行為を重ねることで共通の文脈を確立すると著者は論ずる。この点は、著者の同僚である木村大治 [2018] が近年詳しく論じていることがらであり、研究のフロンティアに関する両者の対話を彷彿とさせる。

同じく文脈が共有されていない状況でおこなわれるのが、乳幼児とおとなとの相互行為である。第5章「発達と社会化」ではこの点が論じられる。発達心理学では必ずしも強調されない「相互行為における文脈の確立」に著者は一貫して着目しており、著者の研究姿勢がよく現われている。また、第6章「言語とコミュニケーション」でも、著者はこの視点を一貫して維持している。示されている事例は、もちろん、まったく言語を理解できない乳幼児よりはやや年長の子どもである。相互行為に言語が介入してあらたな相に移行するようすが、具体的に提示されている。

第7章「感情」では、文脈という前章までの通奏低音がいったん後景に退く。じっさい、感情というテーマは、相互行為をつうじて社会的に構成されるというよりは個人の心理過程としての側面が強く、第6章までのテーマとの共通性が低い。それにもかかわらず著者は、個人の内面に視点を移すのではなく、感情にまつわる語彙をとおして感情が社会的に構成されることがあると指摘し、あくまでも社会的文脈から個人の心理過程を捉えようとする。感情に関する知見は、相互行為

の人類学においてまだ蓄積される途上にあるようだ。個人に由来する（としばしば考えられている）ことがらとしては、感情としばしば同一視される感覚や情動のほか、意図や期待といったより論理的な心理過程も含まれる。これら個人的動機の社会的構成については、まだまだ解明すべき点が多い。かくいう評者も、社会的なアイデンティティ構築における感覚の重要性を論じたことがあるが〔飯田 2010〕、相互行為との関連ではまだまだ論じたりないと痛感している。ぜひとも本書の著者が先頭に立ち、本書の読者たちを率いて、未開拓の領野を拓いていただきたい。

#### 今後の課題と展望

終章である第 8 章「結論にかえて」は、第 7 章までの論述が要約されるとともに、本書全体の事例をふまえて、各章に通底していながら明示的に述べられていなかったことがらがあらためて明示される。それは、心的カテゴリーの脱構築（第 2 節）、文化的実践、慣習、社会制度（第 3 節）、そしてフィールドワークの魅惑（第 4 節）である。ヒトどうしのコミュニケーションは、あらかじめ定まった見取り図に従って展開していくのではなく、コミュニケーションの場に応じて修正され、その場で創発されていく。文化や慣習、社会制度といった集合的に説明されることがあっても、そうしたミクロな偶発性の積みかさねによって次第に組織化される。そのプロセスを簡単に述べれば、次のとおりである。さまざまな記号論的パターンが社会的に共有され、それを共有する者たちのあいだであら

たなコミュニケーション形式が生まれると、「コミュニティ化」とでも呼ぶべき集合現象の実体化が進んでいく。しかし著者の強調点は、そうしたコミュニティが必ずしも実体として捉えうるのではなく、つねに構成され変容されているということである。

最後の「フィールドワークの魅惑」についての 1 節は、やや唐突ながら、研究者があらたな理解や発見に到達するうえでフィールド経験が重要であると説いている。社会学者高橋由典のいう「体験選択」、作家村上春樹の「長い旅」、霊長類学者伊谷純一郎の「アフリカの毒」など、いろいろな例が引かれているが、要するにフィールド体験によって自分にとっての日常を相対化することが相互行為の人類学にとっても不可欠だといっているのである。なるほど、相互行為の人類学が着目する相互行為のかなりの部分（ひょっとすると大部分）は、日常的な場面でくり広げられる。しかし、それをあたり前のしかたで見たり記述したりしても、発見は得られない。ビデオ映像記録にせよ会話分析にせよ、あたり前とは異なる方法を駆使して日常を異化してこそ、日常を成り立たせる構造はあらわになる。場所の移動がともなわなくとも、未知をかいま見るといふ心構えが、相互行為の人類学を進めていくうえでは必要なのだ。

考えてみれば、本書は矛盾に満ちた本である。日常を非日常として見るという方法、かぎられた個人の行為を出発点として文化や社会に到達しようという目的意識、そして、独創的なレビューによって専門的に初学者をいざなうというスタイル。不可能にもみえる矛

盾の克服を本書がみごとになしとげている理由のひとつは、著者の力量もさることながら、相互行為の人類学という分野の性格にもよるのかもしれない。著者によれば、「地に足の着いた事例の丹念な分析は、凡百の抽象的な比較や考察を凌駕するというのが人類学のもっとも基本的な教えの一つである」(p. ii) という。思えば、1990年代に近衛ロンドの大学院生たちがよく口にしていた言葉のひとつに、「神は細部に宿る」という聖書の箴言があった。細部に徹底的にこだわることで普遍にいたろうとする学問的営為の力強さが、本書の随所にも伝わっている。

## 引用文献

- 飯田 卓. 2010. 「ブリコラージュ実践の共同体—マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80.
- 木村大治. 2018. 『見知らぬものと出会う—ファースト・コンタクトの人類学』東京大学出版会.
- 谷 泰編. 1987. 『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所.

川田牧人・白川千尋・関 一敏編. 『呪者の肖像』臨川書店, 2019年, 292 p.

村津 蘭\*

人はどのようにして呪術を学び、呪者となっていくのか。こうした疑問をもとに、日本、東南アジア、アフリカ、太平洋諸島から中世ヨーロッパに渡る幅広いフィールドにお

いて、研究者たちがそれぞれに出会った呪者を描き出す。呪者とは、超越的な力を使い望ましい状況を得ようとする営みを行なう人、すなわち呪術を執り行なう人のことであるが、本書ではまず、その描かれる呪者の人物像に惹きつけられるだろう。不幸や鍛錬、或いは幻想的な旅の経験などを経て、目に見えない力と交渉する技術を身につけた呪者たちが、各章で人間味の溢れる存在として現れてくる。本書の終章において関一敏は「呪術者の肖像（阿部年晴）に焦点をしばって、『呪術世界に入る』ことと『半分のまじめさ』（Mauss, 1904）にふれてみる必要」（p. 270）を説くが、本書は、時に胡散臭く時に献身的な呪者のふるまいや人間像を通して、まさに「呪術世界にふれる」ことができる本となっている。

それらの人物の魅力はむしろ、各執筆者のフィールドで培われた信頼関係によって引き出されているものだが、方法論的には「呪者を描く」という本書を通じてのテーマに支えられているといえる。呪術・宗教・科学というカテゴリーを考えた際、誰でもが結果を再現し得るとされる「科学」と比して、「呪術」は呪者自身の個人的資質や技術に基づいている。本書の表現でいうと、科学は離床度が高く、呪術は「離床度（＝代替可能性）」(p. 271) が低い。すなわち、呪者個人に焦点をあてることによってこそ、人格と呪術的な効果の関係が掘り下げられ、呪術が成立し再生産される際の社会的合意とその性質が明らかになることが期待される。それによって、「呪術とはなにか」という根源的な問い

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

にせまろうというのが、本書の目的である。

本書は、序、1～11章、終章という構成をとっているが、各章を紹介するには紙幅が足りないため、序文で示された問題意識と結びつける形で幾つかの章を紹介していきたい。

まず、人が呪者となる過程に焦点をあてたものがある。フィリピン・ビサヤ地方のメレコと呼ばれる2人の呪者の形成を追った川田牧人（第2章 鍛錬と天賦—呪者になるためのふたつの経路）は、呪者には自発的な動機から呪者になろうと努力する「鍛錬」型と先天的に霊的な資質がある「天賦」型があるとする。しかし、両者は見かけ程乖離したのではなく、呪者の肖像はその2つの要素が「入れ子のように互いに組み合わせあって」（p. 57）成立していると論じる。そのような呪者の形成過程に対して、ヴァヌアツ・トンゴア島の治療師について論じた白川千尋（第9章 治療師としてのふさわしさ—ヴァヌアツ・トンゴア島の伝統医療と担い手の関係）が目にするのは、呪者の知識に対する「受動性」である。白川の事例では、呪者は自ら知識を得るだけでなく、夢見を通して「ナエタタム」と呼ばれる超自然的な存在に治療方法を授けられる。本書では、呪術的な知識は呪者と密接に関わっているため離床度が低いという論に沿っているが、それは知識そのものの性格だけによるものではない。むしろ「知識を実行性あるものにする力」との関連で論じられるべきではないかという見解を白川は提起する。

本書の複数の章で、治療師の資質として「献身的であること」や「金儲けを目的とし

ないこと」があげられているが、その理由を「公共性」という視点から論じたのが梅屋潔（第11章 〈呪力〉の「公共性」）である。新潟県佐渡島の宗教的職能者と、ウガンダの聖霊派キリスト教の〈霊媒〉たちの事例をクロスオーバーさせながら、梅屋は彼らが呪者となった道筋を辿る。その過程に共通するのは、世界の多くの地域における成巫過程と同様、数々の不幸の経験である。梅屋はこの個人的で代替不能の経験が、呪者になることによって合理化されている点に注目する。すなわち、呪者は、コミュニティによって周縁化されかねない不幸の経験を、「神に選ばれた身であるから」という日常の論理ではない方法で、当事者やコミュニティに納得させるのである。そして恐らくその過程を経ているために、それによって得た力は「公共性」を帯びるのである。この議論は、巫病のプロセスを「共同体の脅威になり得る個別のオンリーワンの能力を、〈コモンズ〉として承認させるプロセスとして」（p. 259）理解しうる可能性を開いている。

一方で、積極的に金銭の追求を行なう呪者もいる。近藤英俊（第8章 冒険する呪者たち—ナイジェリア都市部呪医の実践から）が論じるのは、ナイジェリアの都市カドゥナにおける呪医の「冒険性」である。この複数の文化が混じり合う都市には、金銭的利益に高い関心をもつ呪者が多く、呪者たちは常に自分の評判を高めるため「本物」の呪術を探求している。自らがイカサマ呪者でも、どこかに「本物」の呪術があると考えた姿勢は、世界の多くの呪術師に共通する。近藤はこの現



象を、呪術が可視的な実践と不可視の力という二重性からなる点に着目して説明する。見えるものの裏に、見えない真実があるという相貌と、やってみなければわからないという不可知性が、呪者を冒険的探究へと動機づけている。そして、その本物の探究が実は「偽物」の呪術を作り出しているのだと近藤は論じる。

呪者が本物かイカサマかという問題は、「イカサマ僧侶」に対する言説が宗教空間の一部となっているタイの状況を描いた津村文彦（第1章 イカサマ呪者とホンモノの呪術—東北タイのバラモン隠者リシ）も論じている。津村もまた、呪者をイカサマとして否定することが、逆に本物の呪術的知識をどこかに存在させることにつながっている点を指摘する。津村は呪術やトリックを見る人々の経験に注目し、それが「成功」することを支えているのは、呪術への希望によって人々が「見えない部分を雑多に想像力で補って理解するような世界の関わり方」（p. 37）をしているからだと論じている。

呪者を取り巻く人々に対する説得力の問題は、飯田淳子（第6章 力と感性—北タイにおける二人の呪者）も共有する。飯田はゴッフマンや関を引きながら、呪者が呪術的实践によってどのようにオーディエンスを説得し、物語を共同で構築しているのかに注目する。その説得のあり方は、飯田が例に出す2人の呪者によって対照的に示される。ひとりには宗教という制度的基盤をもった、伝統医療の知識をもつ呪者であり、もう一方は文字よりも感性に頼る部分が多い呪者である。後

者の方が「離床度」が低い呪者であるといえるが、それは後者の呪者がもつのは、主に身体感覚を通して獲得される〈いま・ここ〉に根差した知識で、文字が介在していないからである。飯田は、呪術には文字や呪文のもつ「説得力」と同様に、身体に根差した感性のもつ「説得力」があるのではないかという視点を提起する。そして、それぞれの呪者がそれぞれの説得力を用いながら社会的合意に基づくパフォーマンスを遂行することによって、呪者自身もその物語の中を生きるようになるのだと論じる。

また、呪術が呪者本人と結びつきが強く、離床度が低いとする本書の枠組みについて、その結びつきを決定するのは呪者の属性というよりも、社会的合意であるという論点が、片岡樹（第10章 妖術師の肖像—タイ山地民ラフにおける呪術観念の離床をめぐる）によって提起されている。特に、タイ山地民ラフにおいて「妖術師」と呼ばれる無意識的に人を害するとされる存在は、本人が名乗る訳ではなく、周囲によって決められる傾向が非常に強いものである。現在呪術論は妖術も含んでいるが、離床度という基準で呪術論を発展させていくことを考えると、「呪術」というくり以外の軸を設定する必要があるのではないかと片岡は提起する。

以上、本書の幾つかの章について簡単に紹介してきたが、これだけで既に「呪者を描く」というだけに留まらない、多くの論点が提起されていることが理解されるだろう。それぞれの呪者の丁寧な描写だけではなく、飯田による「身の入れ方による説得性」という

考え方や、梅屋の呪者を「コモンズ」とみなすという提起など、呪術研究に新たな視点を与える重要な指摘が多くなされている。個々の呪者のそれぞれについて展開される議論を追いながら、その差異と共通点について考えるのは、実にエキサイティングな作業である。

しかし欲をいえば、各執筆者が議論した内容について、執筆陣で議論して描かれた総合的な呪者の素描をみたかったという思いもある。各々の章が描き出した呪者は、それぞれ地域もバックグラウンドも異なるフィールドに基づいているのに、明らかに多くの共通点がみられたからである。関が呪者の肖像を描くことで目指したのも、「一般化しうることは何か」(p. 270)を模索することであった。このことを鑑みても、各章における「呪者の肖像」をもとに何が普遍で個別かという点について議論するのは、大変興味深い試みになるのではないだろうか。

また、本書は科学・宗教・呪術というカテゴリーの中で呪術の「離床度」をみるという議論をしているが、多くの執筆者が描く呪者の実践において、宗教と呪術は分離することが困難なくらい入り混じっているようにみえる。今後の展開においては、たとえば飯田が第6章で提起した、制度的基盤や言語、或いは感性への依存性という軸で実践を区切ってみるなど、科学・宗教・呪術というカテゴリーではなく、本書で提起された観点から分析枠組みを見直すことも可能であるように思う。

いずれにしても、「このような試みはいま

だ緒に就いたばかり」(p. 11)と語られているので、今後、呪者についての議論は更に発展していくものであると考える。次はどのような呪者に出会うことができるのだろうか。今から楽しみである。

長津一史. 『国境を生きる—マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』木犀社、2019年、481 p.

足立真理\*

国境とは、そこに生きる人々にとってどのような場所であろうか。本書は、この魅力的な問いに対し、マレーシア・サバ州とフィリピンの国境を生きる海民＝海サマ（バジャウ）の視点から国境の意味を探ることを試みた民族誌である。

民族誌としての厚い記述もさることながら、フィールドワークから20年の歳月をかけて構想された本書は、①民族の生成と再編、②開発過程と社会の再編、③イスラーム化と宗教実践の変容という3つの課題にこたえるべく、三部構成で編まれている。1997-1999年にスル諸島のカッロン村で地道に収集したフィールドワークのデータを用いて、各部で議論を展開し、国境社会における人々の「生の文脈」を体系的に描き出した大著である。まず、本書の内容について紹介し、次にその意義、議論を整理する。

本書は序結と第1章を除いた10章を大き

\* 京都大学東南アジア地域研究研究所

く分けて三部構成で作られ、各部のテーマに即した章が付属している。序章では、国境社会という著者の定義と、研究の視座が整理される。続く第1章の「フィールドワーク」では、著者が文字どおり足で稼いで作成した地図や悉皆調査について説明されており、これは人類学における模範的なフィールドワークといえよう。

第I部は、海サマとスル諸島における他民族についての概説である。海サマに関する先行研究が十分に整理されている(第2章)。次に、スルタンを最高権威者とするイスラーム国家であるスル王国の歴史と、それに連動した民族生成(エスノジェネシス)過程を中心として、植民地期から1990年代後半までの調査地の歴史過程が概観される(第3章)。そしてマクロな公的権力による語りと、バジャウ自身の日常の語りを考察することにより、マレーシア・サバ州におけるバジャウ(海サマも含む海民)についての民族表象の変容が明らかになる。かつて与えられたネガティブな「放浪的で無知な船上生活者(p.138)」という表象を逆手にとって、あえて自己表象として復活させることにより、国境を管理し、「違法な」越境を拿捕しようとする国境社会の政治状況に対処しようとする様も描かれた(第4章)。読者は、行政文書と日常の双方の語りを往還することにより、海サマを含むバジャウの「民族の過程」のダイナミクスを相補的に理解することができる。

第II部は開発や社会的変容がテーマである。第5章では、マレーシア・サバ州のセ

ンボルナ郡における国籍保有者と非国籍保有者との関係の変容が描かれる。第6章では、調査村のカッロン村の社会構成や村の形成に至るまでの歴史が、詳細に記述される。また、同じ「サマ」でも、先住民と移民との間に社会的分裂があるとされていることについて、村の住民と世帯についての統計データを基に客観的に検証がなされる。カッロン村における開発をめぐる社会動態の展開は、マレーシアという国家がその開発の実施を通して国境社会に介入し、海サマや他の住民の間に国境を内在化しようとする過程(p.234)と言い換えられる(第7章)。

第III部には4つの章が含まれる。第8章では、マレーシアにおける州政府によるイスラームへの関与の過程が「イスラームの制度化」と定義され、サバ州における宗教状況の沿革が記される。サバ州における州条例、行政システム、教育の分野に関するイスラームの制度化の沿革を、半島部マレーシアでの制度化の沿革と比較し、(1)マラヤ化と(2)公的性格の卓越という特徴を浮き彫りにした。

第9章では、カッロン村に焦点が絞られ、1970年代以降の海サマのイスラーム化の過程がまとめられる。その過程で鍵として、①地域の公共イスラーム空間への参入、②イスラーム指導者とモスクに対する公的商人の獲得、③イスラームの知的権威としての「ウスタズ」の排出、の3つの局面が微細に描かれた。イスラームをめぐる社会秩序は、郡から村における公認イマムに至るまで再編され、その結果、イスラーム指導者、教育、そ



して日常の行ないを公的-非公的という二分法で区分し、前者をより「正しい」イスラームとみなす認識が一般にも広まってきた (p. 288) と指摘された。

続く第 10 章と 11 章では、村落レベルでも公的イスラームが「正しい」と認知されていく中で、海サマの信仰や儀礼はどのように変化したのかが論じられる。第 10 章では、海サマの信仰や儀礼の中でも「伝統的」といえる霊的概念 (ジンやサイタン、祖先霊ンボなど)、恥や崇り (ブスン) についての事例が多く紹介される。第 11 章では、衰退しつつあった初米儀礼マゲンボと、逆に盛んに行なわれるようになった死者霊儀礼マガルワの 2 つが取り上げられる。異なる立場の人々がそれぞれ、異なる解釈に基づいて儀礼に関わっている状況が描かれ、まさに多声的な状況 (p. 374) であると指摘された。著者は、この多声的状況を、ボーウエンの「儀礼の区画化 (compartmentalization of ritual)」という概念を援用することで、ひとつの儀礼において互いに干渉しない複数の区画に分割されている状況と捉えなおせると指摘している (p. 381)。そして、このようなマガルワ儀礼の再構築は公的イスラームに規定された秩序の間隙において、海サマが創造的かつ能動的な宗教実践面での適応であり、機能主義的にいえば、2 つの儀礼の衰退と活性化の要因として解釈できると結ばれている。

結びの章では、全三部に共通する議論の方向性として、国境社会を生きる海サマが、国民国家の制度・構造に組み込まれる中で、いかに主体性 (エージェンシー) をもって自ら

の社会を再編してきたのかを問うことに力点をおいて (p. 385)、まとめられる。

以上が本書の概要である。構成的にも第 III 部に大きく紙幅が割かれており、評者の問題関心も東南アジアのイスラームにあるため、第 III 部のイスラーム化と宗教実践の変容に特に着目して、本書の意義と議論を整理する。

本書が意義深いのは、制度化を捕捉したうえで、儀礼の変容を民族誌的に記述している点である。これは、イスラームにおけるマクロな文脈に位置づけて、カッロン村のアクターを微視的に描写することにより、ミクロな動態を論じているとも換言できよう。イスラームの人類学的研究において看過されていた制度化研究を補完しつつ、丁寧に儀礼の変容を捉えて論じることで、読者にとって総合的な理解を促している。

本書の意義として次に挙げられるのは、公的=「正しい」イスラームという方程式が周縁にも浸透していく様子が、動態的に描かれる点である。海サマの語りからは、彼らをアッラーに呪われた民とする差別神話 (p. 292) から脱却するためにも、「正しい」ムスリムとして認められることの重要性が繰り返され、他のムスリムと対等な社会的地位を獲得していく様子が示される。イスラーム制度化の過程で再編されたセンボルナのイスラームをめぐる社会秩序においては、もはやスル王国に起源するかつての民族間関係ではなく、公的-非公的という区分が「正しい」ムスリムであるためのより重要な参照点になっていた (p. 297) という指摘は興味深く、説得的である。まさに、公的な回路を通じた

イスラーム化は、海サマたちの意識化された社会運動でもあった (p. 301) といえる。

本書では、同じく海サマを対象として、その越境性や跨境性に着目した先駆的研究である鶴見 [1987] や床呂 [1999] のややロマンティックともいえる描き方に対して、海サマを「国家と対峙しながら国境を生きる人々」として描こうとしている (p. 8)。そこには、近代国家の恣意性や暴力性に留意しつつ、国境を生きる周縁者の視点から社会と国家とのオルタナティブな関係を展望しようとする意図のもとに採用した、著者の戦略的リアリズムに立脚する視点がある (p. 9) という。近代国家マレーシアにおけるイスラームという文脈上、その圧倒的な制度化、社会的権威が強い国家に対して「対峙」するという表現は散見される [Camroux 1996; 塩崎 2016] が、本書を読み進める当初は、海サマが何に対峙しているのかあまり判然としない印象を受けた。しかしながら、能動的に読み替えたり、試行錯誤をしたりしながら生きる海サマの人たちの民族誌を読み進めるにつれ、公的表象 (第4章) や開発をめぐる政治 (第7章)、「正しい」イスラーム (第11章) などの具体的な対象に対峙する海サマの人々の姿が浮かび上がってくるようであった。なによりも、本書において、国境と密接に関係しながら人々が日々の生活を紡いでいる社会を国境社会 (border society) と名付け、定義したことによって、辺境でより社会的な力が降り注ぐ場において、国家と対峙するという言葉が明確に生きてくるのであった。

序論で投げかけられた、海サマにとって国

境とはどのような場所か、という本書を通底する問いに対して、著者は一貫して海サマの視点からみた社会編成の動態を描くことにより、読者に海サマの視野や歴史的体験を通しての答えを示唆していると考える。他方、強いて本書の課題を挙げるとすれば、ムスリムにおける最重要信仰儀礼のひとつともいえるザカート (義務の喜捨) の制度化についての言及が、資料紹介にとどまっていた (p. 254, p. 280) 点であろうか。マレーシアの各州において宗教税のような形で強制性をもって徴収されるザカートについて、カッロン村における「正しい」徴収法や、カネの巡りが描かれれば、本書の狙いである国境社会において国家と対峙しながら生きる海サマの姿がより構造的に描かれたのではないかと思う。とはいえ、この指摘は評者の関心に基づく一方的な要望であり、膨大な文献を渉猟し、長期のフィールドワークを経て編み出された本書の魅力を損なうものでは全くない。

本書は、マレーシア研究者、文化人類学者、海民研究者、イスラーム地域研究者のみならず、1997-1999年という重要な時代の民族誌的記述として読み継がれるべき古典となるであろう。拙速な時代に生きる我々に、模範的かつ地道なフィールドワークの方法を教えてください。その価値は大きい。

#### 引用文献

- Camroux, David. 1996. State Responses to Islamic Resurgence in Malaysia: Accommodation, Co-Option, and Confrontation, *Asian Survey* 36(9): 852-868.
- 塩崎悠輝. 2016. 『国家と対峙するイスラーム—

マレーシアにおけるイスラーム法学の展開』  
作品社。  
床呂郁哉. 1999. 『越境—スルー—海域世界から』  
岩波書店。  
鶴見良行. 1987. 『海道の社会史—東南アジア多  
島海の人びと』朝日新聞社。

砂野 唯. 『酒を食べる—エチオピア・  
デラシャを事例として』昭和堂, 2019  
年, 256 p.

田中利和\*

「酒」を「食べる」というタイトルは印象的である。私たちにとって「酒」は酔いや交流を楽しむ嗜好品として「飲む」ものであるという感覚があるからかもしれない。エチオピア南部諸民族州デラシェ特別自治区に暮らす東クシ系農耕民デラシャの人びとは、パルショータとよばれる「酒」を「食事」として大量に「飲む」生活をしている。「酒」を食事とする文化は、かつての日本も含め世界各地に存在したが、そのほとんどが嗜好品や儀礼用になっていったらしい。デラシェは、「酒」をほとんど唯一の「食事」とする人類の農耕文化と知恵が現存している世界的にも稀な地域であるという。

本書はデラシャの農業、食、文化の複合体としての「酒」の意義について、フィールドワークと農業科学の実証データの分析を駆使して、描き出したものである。また、本書は著者の博士論文を改稿したものである。構成

をみていこう。

序章「食べ物である酒との出会い」では、研究のきっかけについて書かれている。著者は当初、エチオピア起源のイネ科の作物「テフ」に関心があったものの、紆余曲折し、デラシャの人びとが「酒」を「食事」とすることを研究テーマにしようと決心する。そして、従来の飲酒の観点を踏まえたうえで、パルショータという「酒」を総合食品として捉えなおし、農業と文化の接合点として位置づけ、「酒」を「食べる」とはどのようなことであるかを検討してゆく本書の流れを示している。

第1章「食べる酒パルショータの作り方」では、醸造法工程の複雑さと特性を細かく説明している。デラシェには、乳酸発酵させないカララと、アルコール度の高いネッチ・チャガという2種類の飲みものがあるものの、「食事」として常時飲まれるのは、緑色濁酒のパルショータのみだという。もともとはモロコシでつくられていたが、近年は3~5割ほどトウモロコシを混ぜてつくられる。乳酸菌の添加源となるケールの葉や、乳酸菌以外の雑菌の繁殖を抑えるモリンガの乾燥した葉が加えられ、この緑葉がビタミン源となる。これらの原料と特定の乳酸菌や酵母によって、奈良漬けや粕漬けのような発酵臭と風味を生成し、コクと渋み、糖の甘み、乳酸発酵による酸味が合わさった、独特の風味をもつ酒となる。おいしいパルショータづくりは奥が深く、モロコシの品種の配合や、貯蔵法など、熟練した年長者が秘訣を知っているようである。

\* 東北大学東北アジア研究センター

第2章「酒を主食にする食文化」では、デラシャの人びとが毎日平均5キログラムの酒を食する日常を描いている。単に酒であればよいというわけではなく、デラシャの人びとの心身を支えているパルショータのみが重要な「食べる酒」であるという。このことを、結婚式の裏側、夫婦喧嘩などのエピソードも踏まえ、説明している。さらに、毎日100グラム中に3~3.5グラム程度のエタノールが含まれるパルショータを5キログラムも食す実態に関して、デラシェ地域の文脈に沿って検討している。それを可能しているのは、人びとが大量のアルコールを分解できる体質を有していることや、起きている14~16時間半のうち3~5割の時間をかけてゆっくり飲み続けることで、身体に無理なく分解している点にあると、著者は見積もっている。アルコールとの付き合い方が幼いころから身につけているため、高揚感をもとめた無理な飲み方や、酩酊し、管を巻いて喧嘩をするという人はまったくみられないという。

第3章「パルショータの栄養価」では食品分析の結果が論じられる。人間の健康を維持するには、カロリー源となる炭水化物に加えて、脂質、ビタミン群、食物繊維などの必須栄養素をバランスよく取ることが不可欠である。特にタンパク質や必須アミノ酸は補給し続ける必要があり、食生活を評価する基準にもなる。一般的には、肉や魚、乳製品やマメ類から摂取する。これまでパルショータの原料である穀物には、含まれるタンパク質やアミノ酸が少ないとされてきたが、著者は、

発酵を通じて栄養価が向上している可能性がある」と指摘している。人間の生存と活動のために必要なカロリー、パルショータの化学的組成、飲量の実態との関係も分析したうえで、健康を維持できるバランスのよい総合食品であることをあきらかにしている。

第4章「デラシェ地域の農業」は、歴史、畑の土壌の性質、地勢、作物と農法の特徴を説明している。16~17世紀にかけてエチオピア南東部から移住してきたオロモの人びとが定着させたモロコシがデラシャの人びとにとっては最重要であり、伝統的な生活を続ける村では多様な品種と特性を生かした利用が確認できるという。30年ほどまえに農村開発政策によって導入されたトウモロコシは、モロコシに並んで栽培が盛んになったという。畑の土壌を分析した結果では、玄武岩が風化し、砂や粘土物質と混ざって生成された土壌であり、優れた団粒構造をもち、概して肥沃な土壌であると評価している。デラシェの地勢を生かした畑作りの特徴として、(1) テラスで土壌侵食を抑えつつ作物残渣で地力を保つ、(2) 石と作物残渣でつくる格子状の畦で養水分を保つ、(3) 小石に覆われた斜面をそのまま使う、(4) 段斜面や平坦地で格子状の畦をつくって養水分を維持する、といった4つの農法をみることができる。

第5章「モロコシを保存する地下貯蔵穴ポロタ」では、深さ2メートル最大直径1.5メートルで、2トンのモロコシを貯蔵できる、フラスコ状の地下貯蔵庫ポロタの特性を多面的に論じている。一般的な穀物貯蔵庫の問題点は、害虫やカビによる劣化などがあげられ

る。しかし、難透水性の土層を掘ってつくられるポロタは、モロコシを密閉することで 20 年も保存ができるという。「害虫が死ぬほど薄い空気」と表現される低酸素濃度であるポロタ内に、空気を十分入れ替えずに入ると、酸欠によって倒れる事故もあるという。モロコシを入れて蓋をすることによって一部は酸素を使い発芽し、二酸化炭素濃度が高い空間となり、品質の劣化が抑制されて長期保存が可能になるのである。この保存機能は、不安定な気候による収量の変動差や、抗争が頻発する社会情勢への対応力として、地域の食料自給を支えてきたという。また著者は、公共の場や他人の敷地内においてもポロタを掘れることや、飢饉が続くと多くのポロタをもつ者はそのなかのモロコシを貸し与えるといった慣行について述べ、ポロタ貯蔵の技術と意義をデラシャの文脈に沿って説明している。

終章では、食べる「酒」パルショータの農耕文化としての意義を、生産性、貯蔵性、嗜好性、安定性、安全性、栄養供給として総合的に評価したうえで、未来について言及している。現在、デラシャの人びとはパルショータを好み、そのことに不都合を感じていない。しかし、パルショータ食文化は現代社会のあらゆる要素と結びついているからこそ、その関係のなかで変化していく可能性があり、今後も注意深く見守っていく必要があることを述べている。

評者は、エチオピアで牛とともに耕す農業を研究テーマにフィールドワークをおこなってきた。中央高原に位置する調査地か

ら、南に 200 キロメートルのところにあるデラシェで、「酒」を食品として扱う巧みな農耕文化が現存していることに感銘を受けた。あわせて特異的に発達してきたデラシャの文化を、集約的なフィールドワークと農業科学を織り交ぜ、学際的に厚みをもって描き出し評価した著者の能力と労力に敬意を示したい。特に醸造工程に関する記述では、肉眼では見ることができないが、目の前に存在する「菌」の世界の働きもあわせて分析した点は称賛したい。特定の菌が主食の「酒」をつくる過程で、発酵を通じて栄養価を高めるといった、重要な役割を担うことを描き出した点は大変優れている印象をもった。エチオピアは多様なものがともに根強く生きる「るつぽ」である、という感覚が評者には育まれてきたが、本書は説得力をもって、この考えに独特の風味を加えてくれた。

ないものねだりになってしまうが、評者のフィールドワークの経験と照らしあわせて、気になった点を 2 点あげたい。

1 つ目は、近年評者の調査地の農村部でも目立つようになってきた「ふくよかさ」や、一部の富裕層のいきすぎた「肥満」といった課題とデラシャの関係である。モロコシの貯蔵ができ、近隣民族との接触もあり、バランス栄養食のパルショータを飲み続けてきたデラシャの人びとにとっては、「ふくよかさ」や「肥満」とは無縁であったのだろうか。今日の世界的な課題であるこの点について、栄養学的観点と、人類学的視点をさらにもって検証がなされたなら、現代の世界における総合食品の「酒」としての意義をさらに深掘り



できると思う。

2つ目は、「歯」と健康の関係についてである。評者のフィールドでは人に限らず牛の健康をはかるとき、「歯」が強く丈夫なことは食べること、噛むことと関連付けられて重要であると語られる。実際に瓶の栓を「歯」で抜く、動かない牛の尻尾を「歯」で噛むなども目にする。濁酒を飲むことが主で噛む習慣が食事中にないと想像する彼らにとっての「歯」に関する価値観や強さ、さらにいえば、顎を含むデラシヤの人びと特有の身体的特徴はあるのか、疑問に思った。

本書は農業科学的な分析過程も化学式など

を用いて示し、現地の農業・醸造に関する語彙をそのまま表記している。そのため、馴染みがない人にとってはやや専門的すぎて、癖がある本だと感じる人もいるかもしれない。しかし、私たちの身近なビールなどの醸造方法まで自分で調べて対比しながら、総合食品としての「酒」の特性を記述する本書を丁寧読みすすめると、その癖のある風味が増してきて、あらたな嗜好を楽しむ気分で読み終えることができる。フィールドワーク・農業科学・食文化・酒にまつわる総合研究のおもしろみに、ほどよく酔いしれることができる大変優れた学術書である。